



號九十六第
 月六年八十和昭
 行發日十・回一月每
 錢五部一價定一
 錢十六(共稅)分年
 一才 田杉 編發行發
 人刷印
 國公谷比日區町觀市京東
 社信通盟同 所行發

思想戰の勝利獲得へ

日本精神の基調と家族主義

社長 古野伊之助

(一) 前線を偲べ

敵中突破の経験

私は支那事變中には度々前線に出て親しく皇軍將兵の戦ふ姿に接する機会があつた。支那事變勃發の翌年、昭和十三年であつたと思ふが、或る最前線を訪ねる必要があつて山東の戦野に約三千キロ、群がる敵軍を隨所に撃破して、前線へ前線へと進むトラックで運ばれて行つたことがあつた。

戦闘司令所に入ると、ここは僅か一個中隊ぐらゐの守備兵を置いて、全部の兵力は前線に出てしまつてをり、その周囲は三、四個師團ぐらゐの敵兵力に圍まれてゐる。その中に泰然自若とした兵團長が作戦を練つてゐたのである。

その司令所に入つたら、もう出ることが出来ないで四、五日間そこに籠城した。夜となく、晝となく敵兵の襲撃があつて、私も何度となく夜中にピストルを持つて飛び出したことがあつた。

そのとき、その司令官が「かうやつて最前線で戦つてゐると、われわれ、將兵の指揮にあたる人間は統帥三昧に入つてゐる。これが人間として、まあ一番尊い仕事ではなからうかと思ふ。陛下の赤子の生命を預つて「しつかりやつて來い」と言つて朝送り出すと、夕方にはその中の何名かは或は傷ついたり、或は仆れたりして戻るのである。かうした姿を普通の人間の氣持ちで接し、見てをられるだらうか。」

と、その將軍は述べたのであつた。

天意 何處に

君のため、國のため全將兵は命をすてる。司令官も生きてゐる積りはない、そしてその將兵は一人々々が親もあり子もあり、兄弟も妻もある人々である。それがすべて己を忘れ、家をして、すべて全身、全能を國のため捧げるのである。

この姿を目撃して、私はかうした統帥の任にあたる將軍達の心持ちを感じて四、五日を送つた後、無事に戻つて來ることが出來たのである。

行きも歸りも道の兩側は敵軍で文字通り硝煙彈雨の中であるから非戦闘員である自分も、何時命を捨てるかも知れないといふことを

もちろん覺悟の上であつた。しかし天は私になほ何事かをなさしむべきか、無事に日本に歸してくれたのである。

前線を偲べ

その當時國內においては國民精神を作興しなければならぬといふので、いろいろ論ぜられてゐた。「前線を見よ」といふ感じが非常に強く私の胸を打つた。そして私はこの當時「前線將兵の姿を銃後國民の心とせよ」といふことをしきりに提唱したのである。

しかし私は一方において戦争の経験による日本國民の思想の變化を信じてゐた。前線においてわが精銳がこの尊い體驗を積んでゐるのである。前線で自己を捨ててすべからぬ、あらゆるものを犠牲にして君のため、國のため戦つて行く。この將兵の心構へ、これが日本民族一億を根柢から變革しないでおかないのである。

前線の戦闘の結果そのものといふよりも、前線において生死の巷をものともせず奮戦して、しかし祖國に凱旋する。かうした直接戦闘の經驗を持つ將兵の心構へが日本國民全體の意識と體制とを根柢から革新せしむるに相違ないといふ考へをもち、藉すに二年、三年、五年の歳月を費したなら、日本國民一億は鐵石の一團と化するであらうといふ氣持ちを持つて來たのである。

事變勃發の昭和十二、三年頃からの過去の姿を振り返つて考へて

みると、この五年か六年かの間に素晴らしい變化をしたものだといふ感じに打たれる。前線將兵の心構への銃後國民への明かな反映である。

國民意識の變化

國民精神總動員運動、新體制運動、大政翼賛運動とやかましく叫ばれてゐる中で、私がかつても強く感じたのは農民層の自覺であつた。内原訓練所に招かれて全日本から集つた一萬五千の農村の若者が國のために働くといふ意氣込みをしめしてゐる姿をみて「なるほどこれだ」といふ感じが非常に強く受けた。前線將兵の姿がそのまゝに、この内地で、もうしつかり

躍動しつづつあるといふ感じに打たれたのである。

その後この時局に關聯して、もつとも大きな犠牲者であつた中小商工業者の鍛錬運動を大阪でみたのであるが、段々國民意識の變化した姿、國民體制の變つて行く有様を看取して非常に歎ばしく感じたのである。

新秩序建設の原動力

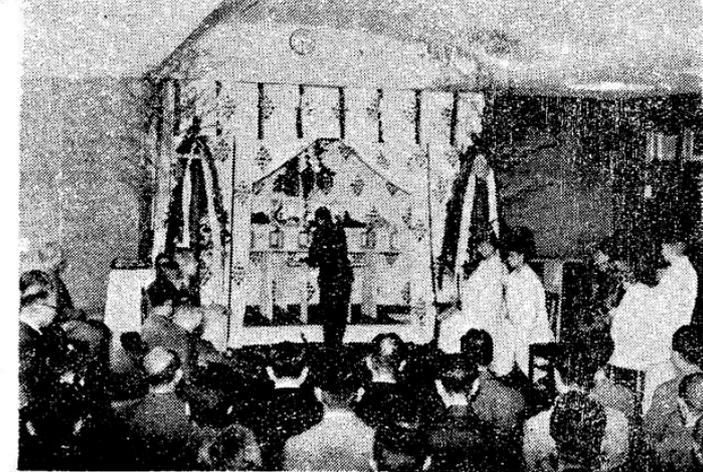
われわれは兎角自分の周邊の事象に眩惑され、大きな流れと全體の動きといふものを、しつかり把握し、これを看破する力が鈍るものである。過去五年、六年の國民意識の變化を今、ここで考へると最早澎湃として日本全土に漲つて

本社新館落成式舉行

かねて麹町區内幸町二丁目二十番地(市政會館前向)に建築中であつた同盟別館

は戦時下における幾多の難關を突破し、六月上旬愈々落成を告げ、七日午後二時より同別館階上會議室において落成式を舉行した。

式は古野社長各常務理事以下幹部參列のもとに日枝神社神職により修祓の後散米行事、玉串奉奠など厳かな神事を進め、杉田總務局參事の工事経過報告あり、次いで工事擔當者吉村組社長吉村安一氏お



よび設計監督者山中節治氏に對して古野社長よりそれぞれ感謝狀を授與、續いて社長の挨拶あり、目出度く式を終つた。かくて一同は別室において祝賀の乾杯を擧げ、午後三時半散會した。

願ればこの建築工事は昭和十六年十月二日入札の結果株式會社吉村組が請負ひ、これが設計監督を山中節治氏に依頼し、本社側では主として總務局杉田參事がその衝に當り、昭和十七年二月九日地鎮祭を執行、同五月三日愈々工事に着手し、同月二十六日上棟式を擧げた。かくて今回竣工をみたものである。

一、敷地 四五八坪(本社所有地)
 一、構造 一部木造外部モルタル
 タイル張り二階建、一部無筋コンクリート外部タイル張り二階建
 一、總建坪 五九一坪四一六
 一、所要日數 四〇〇日
 一、延工員數 九、二五〇人
 外観、内部の諸設備ともに見事な大建築である。

社長訓示

(前頁より)

(二) 家を護る心

彼我の主張の相違

私は一體米英の世界制覇と日本の目指す世界新秩序との間に、どういふ開きがあるか、これをはつきり掴まなくては世界の各國をして日本の主張の正しさを認識させることが出来ないのではなからうかといふことを考へ、絶えずこの問題に頭を悩まして来た。

これはひとり私自身の煩悶ではない。突如として起つた支那事變次いで勃發した歐洲動亂、それから大東亞戦争と目まぐるしい世界的難局に直面して、この大きな變局に處して日本が東亞を、さらに世界を指導するその理念、これをしつかり把握しなければならぬといふことで、學者は學者、政治家は政治家で、あらゆる分野においてそれぞれ立場で苦悶してゐる。諸君にもそれぞれ立場で、十分この問題を検討して貰ひたいと思ふ。

家を護る心

それについて家を護る心、これが結局日本の本然の姿ではなかつたか、己を護る心——これが米英の意識の根柢ではなかつたか、こんなことを私は考へてゐる。日本の民族が家を護るといふ氣持、これが育つたものが藩を護る心であつたと思ふ。

藩を護る心は更に日本を護る心に成長したものである。日本を護る心は東亞を護る心になつた。東亞を護る心は世界を護る心に伸びようとしてゐるのである。

然らば米英は何を求めたか。彼等は如何なる場合においても己を護る心以上に伸びることが出来ないのではなからうか。

己を護る心を基調にして國家を論じ、世界を論じて、結局全世界の諸民族をして、それぞれ所を得せしめ、その塔に安んぜしめる新しい秩序には入つて行けない。

結局は米英の世界制覇、米英の望むところは米英を利用するため、米英を育てるために世界全民族を犠牲にして行くといふ形の秩序以外には考へられるところはない。

米英思想の根柢

そこでこの家を護る心——過去の忠臣烈士の實例をみても日本の歴史の危機と稱する場合においても、いつも非常に強く發揚されたものは己を犠牲にして主君を護り、藩を護り、國を護つたその全體意識である。集團意識である。全體のため、集團のために己を顧みなかつた。己を護るために集團生活をやつて行くのではない。全體を護るために己を捨てる。これを假に家を護る心といふ言葉で表現してみたのである。

米英思想の根柢をなすものは個人主義意識である。しかして個人主義意識から發足した世界の秩序とか、歐洲の安定とかが破綻した結果それを何と安んじて補はうとした思想が社會主義思想であり、共產主義であつた。

ナチの思想、フアシストの考へ方などもこの個人主義意識の一種の修正運動とみるべきではなからうかといふやうなことを考へられ

民族集團の中心

日本本然の姿、皇國日本の眞姿といふやうなものは、家を護る心、皇室を中心の一億の民衆が國を護る心、これが發展し、これが伸びて東亞を護る心となり、世界を護る心に伸びようとしてゐるのではなからうかといふやうなことを考へてゐるのである。

家族主義といふやうな言葉では盡せぬと思ふけれども、若し個人主義に對比して家族主義といふ言葉で述べると、自己に重點をおく考へ方、全體のために自己を犠牲にして顧みない——これが日本民族の本當の姿ではなからうか。

東亞を護るためには一億國民が

あらゆる犠牲を拂ふといふ、この覺悟こそ、やがて十億の民族集團の中心となつて大東亞を率ゆる原動力となるのではなからうか。

諸君の周圍をみても、自己を考へず、一生懸命に全體のことを考へ、周りのことを考へて、努力してゐる人が結局永い眼でみて全體の中心になる。これが人間の共同生活の現實である。民族集團と私生活の現實である。民族集團と私生活の現實である。民族集團と私生活の現實である。

君の参考にも私の隨想を述べたわけである。

(三) 三つの社内問題

在郷軍人會同盟分會

次にこの機會にお話しておきたいことが三つある。その第一は在郷軍人分會を社内に設けたこと、第二は青少年社員錬成の問題で、それから最後に集團檢診の問題である。

第一の在郷軍人會は昭和十四年一月勅令第九號にて發布された帝國在郷軍人會令によつて出來たものであるが、これは兵役義務の一部分である。この勅令にもついで在郷軍人會が組織されたのである。

さうして第二國民兵役に服すべ

きものは全部この正會員に入る。即ち満四十歳未満の男子は全部この在郷軍人會に包括されるべきものである。わが同盟でも、この規定にもとづけば在郷軍人會の正會員たるべき資格を有するものが五百名ある筈なのである。

そこで帝國在郷軍人會同盟分會を設立して當然この在郷軍人會に所属すべき社員を組織して、同盟分會に纏めて、ここで自己錬成を徹底的にやらなくてはならぬといふ考へから、分會設立の申請をしたところ、五月五日この認可が下りたのである。

諸君の中には既に毎朝この訓練に参加してゐるものもられるだらうし、私も数日前、朝の訓練に臨んで社の中堅層が眞剣なる訓練をやつてゐる姿をみて非常に喜んだわけである。

でもないことである。

そこでこの同盟分會の設立によつて一は萬一に備へるため國防に協力し、また一はもつて、これが社内の推進力となつて社内士氣作興に努めたいといふ考へ方にもつき、この分會を作つた次第である。

在郷軍人會同盟分會の幹部十三名はいづれも在郷將校である。最前線において生死の巷を突破してきた諸君である。前線の戰友魂をもつて未教育會員の教導、錬成に當るはずである。

青少年の錬成

その次は青少年の錬成である。同盟の仕事は國家の機關として、國民の組織として悠久の生命を持つ。これをますます内容を充實し、その機能を發揮して行くのは一にも二にも三にも、その衝に當る人間の力である。

そこで同盟を日本の國運の躍進すると同じ歩調で育て上げて行くためには立派な人材を作つて行くことが私の唯一の任務であると考へてゐる。これがためには次の時代を擔ふ青少年の訓育といふことを今から十分に力を注がなければならぬ大事な仕事であると考へてゐる。

この訓育に對しては出来るだけのことをしてほしいと思つて、或は講習所を設ける、學寮を作るなどの方法で眞剣にこの青少年社員を養成に努力しつゝあるのである。

この頃編輯會議室で青少年諸君が朝禮をやり、編輯、發送などの責任者が出て子供の訓育に努力してゐる。しかし青少年訓育はかかるだけのだけの仕事とみるべきではない。諸君一人々々が次の俺達の後継者を作るんだといふ氣持で青少年教導に努力して貰ひたい。諸君の十分な協力を希望する。

集團檢診に就て

最後に集團檢診の問題である。過日來集團檢診を行つてゐるが、東京に勤務する職員總數一千三百五十一名、極く少數の故障あるものは別として残らずこの檢診を受けて貰ひたい。

體の悪いままに、呼吸器を侵されたままに集團生活をすれば、その結果が周圍の家族——同盟家族——一同に及ぶという悪影響をおよぼすことは説明するまでもないことである。一人々々が頭健な體力を提げて、それぞれ職場で戦ひ得るといふことが、自分のためであり、社のためであり、さらに進んでは國のためであることを考へたい。

この積りで折角、長谷川博士が苦心研究の結果、日本から結核病菌を驅逐しようといふ意氣込みで努力してをられる——この長谷川博士が同盟の全社員を健康診断して、疑はしいものは早期のうちになほさう、手當してやらうといふ意氣込みで燃えて飛出してくれたのである。またその學術的な研究と、その眞剣な努力に共鳴して、東京勤務職員全體が檢診を受けて貰ひたい。かくて頭健な體力、旺盛なる氣力をもつてそれぞれの職場で仕事と取つ組み責任完遂に邁進されんことを希望する。(昭和十八年五月八日大詔奉戴式訓示)

青少年訓育の實際

本社産報青年隊長 山本 政常

明日の飛躍のため

同盟が擔ふ重大使命達成のためには一人も人、二にも人で、全く人の問題であります。曠古の大戦を勝ち抜くため思想戦の第一線に戦ふ尖兵を養成し、我が社本來の任務を完遂することは、我が社の最大責任であります。

複雑多岐な我が社の仕事は、職場々々によつて様子が異なりますが如何なる部門の仕事においても、自分よりよい後繼者を作ることによつて明日の飛躍を期待できると思ひます。

それぞれの職場における後繼者の養成を如何なる方法でなさるべきか、これはもちろん一様ではありませんが、青少年の訓育問題のごとき、漠然と普通學を教へて能

事足りるとすべきでなく、次代を擔ふ立派な同盟人育成のため、明確な方針をもつて取扱はれねばなりません。以下本社における青少年訓育設備について若干説明を加へ諸賢の御参考に供したいと思ひます。

學寮の朝夕

本社では社長の方針に従ひ青少年

明治天皇御製

人もわぬも
道を守りてかはらずば
この敷島の國はうごかじ
友
もろとも
たすけかはしてむつびあふ
友ぞ世に立つ力なるべき

編輯幹部錬成會に参加して

編輯局次長 萩野 伊八

惟神道に立脚し、被服に依る國民的錬成を我が國新聞界の編輯最高幹部に行ふべき錬成會が去る四月二十五日から四日間行はれた。場所は新緑の箱根湯本の須雲川畔に在る日本精神道場である。錬成會の主催は日本新聞會、四月二十五日午後二時から明治神宮外苑の日本青年館で開會式を行ふ。集るもの全國新聞通信社編輯首脳四十五名。國民儀禮の後、田中新聞會々長および情報局の宮本新聞課長の訓示ならびに挨拶あり

終つて一同徒歩宮城前へ行進奉拜同夜は青年館に一泊し、翌二十六日五時起床、直ちに明治神宮へ行進、被服の後神前に奉拜した。十時新宿發東京急行小田原線で箱根に向ふ。湯本から登山道約四キロを一行いづれも國民服、戰鬪帽、巻ゲートルの出で立ちにリュツクサツタを背負つて強行軍して十五時日本精神道場に到着、今回の被服の行に道彦、助彦を勤められた安藤、酒井兩先生を迎へられた道場に入った。

△綱領

- 一、皇國の道に則り社是を體現して通信報道に挺身せんことを期す
- 一、神明を崇ひ、君父の温情を體認し、節義を嗜み、以て眞正なる日本青年たらんことを期す
- 一、全寮一體となり、禮儀を恪守し、友和親愛、一大家族の實を擧げんことを期す

年の訓育について種々の施策を講じつつあります。即ち同盟學寮、同盟講習所、一般教育獎勵、正則中學校および正則第二中學との連絡、その他職場教育等であります。

同盟學寮は青少年准社員、雇員等に温い家庭的の住ひを與へ、同盟人育成のための錬成道場を兼ねたもので、麻布区市兵衛町一ノ一にあり、現在約百三十人の同盟青少年を收容してゐます。寮長は鷹嘴常務理事(聯絡局長)

が就任し、正則中學校長今岡信一良氏が顧問となり、同校修練主任岡村氏をはじめ同校教諭數氏が直接指導の任に當つてゐます。

學寮における平日朝晩の行事は左のごとくであります。

午前五時五十分 起床太鼓(洗面、整頓、掃除)

午前六時十分 集合、點呼(雨天の際は廊下)、國民儀禮、綱領朗讀、體操

午前六時四十分 朝食(太鼓)

午後十時 點呼

午後十時半 消燈

次職場場においては毎朝午前八時半瀬川參事を中心となつて朝禮を行つてゐます。先づ國民儀禮を行つた後左掲の綱領および上掲の誓を朗讀します。

このほか毎日曜毎に多摩川道場を開塾を行ひ、月二回くらは清潔週間とか、物資愛護週間のごときものを行つて規律の嚴守と同盟精神の涵養とに努めてゐます。

△綱領

- 一、我等は國體の本義に徹し報道報國の實を擧げ、以て皇運を扶翼し奉らむことを期す
- 一、我等は報道報國の使命を體し大同結盟、職分奉公の誠を致し、以て皇國日本の興隆に總力を致さむことを期す
- 一、我等は勤勞の眞義に生き剛健明朗なる生活を建設し以て國力の根柢を培はむことを期す

右のごとく本社では社長の方針に従ひ青少年訓育に力を注いでゐますが、この目的達成には各部の方の協力を得なければなりません。青少年社員は最も感化を受けるのは直接毎日接する各部の方々であります。この點に注意して明日の後繼者育成に御協力願ひたいと思ひます。

環境の問題

今日この頃本社は社長の方針に従ひ青少年訓育に力を注いでゐますが、この目的達成には各部の方の協力を得なければなりません。青少年社員は最も感化を受けるのは直接毎日接する各部の方々であります。この點に注意して明日の後繼者育成に御協力願ひたいと思ひます。

出版部だより

F・M・キーンジング著
日本外政協會譯
太平洋問題調査部
大南洋諸島の全貌

所謂「南洋」を取扱つた文献は今日内外とも夥しいものがあるが、本書の如く太平洋諸島全般につきその住民・風俗・人口・土地問題・交通・通信・衛生・宗教・教育・經濟組織・政治組織・各國植民政策の全貌等々に亘り綜合的觀察を加へた調査は内外を通じて稀有にぞくする。著者は現ハワイ大學の人類學教授であり、自身過去二十有餘年に亘り太平洋各地の現地調査に當つた。原著者の國籍に對する十分なる配慮のもとに本書は我が國内諸民族統治政策確立のための一有力資料となさるべきものである。

日本思想戰叢書刊行預告

大日本言論報國會編
思想戰の根基(第一輯)
執筆者 山田孝雄、佐藤通次、鹿島胤次、古川武、中柴末純、新明正道、住田正一、津久井龍雄

世界觀の戦ひ(第二輯)
執筆者 鹿子木員信、作田莊一、高山岩男、井澤弘、秋山謙藏、市川房枝、大島豊、小牧實策

小倉支局新設

五月一日左記に小倉支局を新設した。

小倉市大字京町一丁目二三
同盟通信社小倉支局
支局長 水上 勇

新潟支局移轉

新潟支局は五月二十二日左記に移轉した。

新潟市東中通一番町
(新潟日报社内)

國家と文化(第三輯)
執筆者 西晋一郎、大川周明、齋藤响、齋藤忠、藤田徳太郎、天川信雄、穂積七郎、野村重臣

各 實價(税込) 二〇〇錢(豫定)
六月末頃同時に品出來

辭令

マニラ支社 事務副参事 山本 守
マニラ支社 支社事務主任を命ず
 アンボン支局長 黒崎 信由
 シンガラジャ支局長を命ず
 關貢支社事務主任 堀内 精教
 關貢支社事務主任を命ず
マニラ支社 支社事務主任を命ず
 マカッサル 支社事務主任 田中 盛文
 マカッサル支社事務主任を命ず
 西貢支社事務主任 津川 勝美
 西貢支社事務主任を命ず
 西貢支社事務主任 板垣重太郎
 南方總局勤務社員 板垣重太郎
 大坂支社勤務社員 中村 壽雄
 (奈良通信部駐在)
 舞鶴支局主任を命ず
 (五月五日附各通)
編輯局勤務社員 松岡伊一郎
 聯絡局電務部外電主任兼編輯局勤務を命ず(五月十日附)
 京城支社地方 古津 四郎
 編輯局勤務を命ず
 (五月十三日附)
 札幌支社通信主任 渡邊 保司
 大阪支社勤務を命ず
 (五月十五日附)
 南方總局勤務社員 菱刈 隆文
 海外局勤務を命ず
 (四月廿九日附)
 臺北支社勤務社員 石井 英二
 聯絡局勤務を命ず
 南方總局勤務社員 渡邊 正治
 關貢支社勤務を命ず
 (五月一日附各通)
 福岡支社勤務社員 波多江 孝
 鹿兒島支局勤務を命ず
 (五月四日附)
 中支總局勤務社員 關口 武夫
 南京支局勤務を命ず(五月六日附)
 西貢支社勤務社員 藤本 有典
 盤谷支局勤務を命ず
 大阪支社勤務社員 島田 忠雄
 京都支局勤務を命ず
 經濟局勤務社員 坂東 安正
 西貢支社勤務社員 吉澤 正也
 同 古橋朝之助
 同
 ブキチンキ駐在を命ず
 (五月七日附各通)
 九江支局勤務社員 本多 孝平
 杭州支局勤務を命ず
 漢口支局(杭州駐在)勤務社員 福田 稔
 中支總局勤務を命ず
 聯絡局勤務社員 西岡 正一
 臺中支局勤務社員 齋藤 敏雄
 マカッサル支社勤務を命ず
 清津支局勤務社員 齋藤子之吉
 室蘭支局勤務社員 大柿 菊次
 南方總局勤務を命ず
 (五月八日附各通)
 海外局勤務社員 中野 勉
 坂口 哲雄
 永本 一美
 澤砥 政雄
 聯絡局兼務を命ず
 (五月十日附各通)
 關門支社勤務社員 河村 清
 同 林 豊人
 同 山口 胖
 小倉支局勤務を命ず
 (五月十二日附各通)
 總務局勤務社員 日下部吉郎
 京城支社勤務を命ず
 (五月十三日附)
 聯絡局勤務社員 齋藤 清
 名古屋支社勤務を命ず
 (五月十五日附)
 臺北支社勤務社員 高木 凱人
 編輯局勤務を命ず
 大阪支社勤務社員 堀尾 壽春
 臺北支社勤務を命ず
 編輯局勤務社員 榎本 三郎
 大阪支社勤務を命ず
 (五月二十一日附各通)
 京都支局勤務社員 尾本 祐次
 京城支社勤務を命ず
 (五月二十一日附)
 北支總局勤務准社員 森口 光子
 天津支局勤務を命ず
 (五月一日附)
 編輯局勤務准社員 高尾まさ子
 聯絡局勤務准社員 脇坂 久人
 臺中支局勤務准社員(五月八日附)
 關門支社 石川 清
 勤務准社員 辻 ヤス子
 小倉支局勤務を命ず
 (五月十一日附各通)
 釜山支局勤務准社員 音出 正夫
 廣島支局勤務を命ず
 (五月十五日附)
 海外局囑託 戸栗 郁子
 同 フイリップ・ダキノ 若竹 太
 同 余 振常
 同 孫 玉文
 海外局の事務を囑託す
 (四月一日附各通)
 寺田 駒雄
 中大路長三郎
 經濟局の事務を囑託す
 (四月二十五日附各通)
 山縣 正
 聯絡局の事務を囑託す
 古川 友一
 經濟局の事務を囑託す
 (五月十五日附各通)
 内海三八郎
 河内支局の事務を囑託す
 (五月十六日附)
 平方 興平
 中川 清
 村上 辰雄
 下部 清隆
 社員を命ず編輯局勤務を命ず
 (五月一日附各通)
 聯絡局勤務 西里壽三郎
 社員試用 國頭 喜治
 臺中支局勤務社員試用 川崎 靜雄
 社員を命ず(五月一日附各通)

職員養老保險 改正實施

本年一月一日より職員養老保險制度を實施されたが、今回さらにその内容を左の通り改正、七月一日より實施されることとなつた。

一、現行加入資格を男子勤続五年以上、引上げ、女子と同一にすること。

二、保險金額を社員五千圓、准社員及び雇員三千圓に引上げることに。

三、現行規程による勤続滿三年以上の職員に對する保險既契約はこれを存続すること。

四、又保險契約に准ずる病弱者等既得權も同様これを認むること。

五、現行保險年齡超過四十五歳を五十歳に引上げて一部分六十歳滿期の保險契約を新規に行ふこと。

右改正により契約資格を取得す

家族手当改正

七月より實施

職員に對する妻子手当はこれを家族手当に改め、且つその支給範圍および額を左の通り擴大増加し來る七月一日より實施することとなつた。

一、現在の妻子手当を家族手当に改め支給範圍を次のごとく擴大す。

(1) 妻
 (2) 子女(滿十八歳未満)
 (3) 父母(滿六十歳以上)

二、手当額を増加し、且つ家族の居住地により次のごとく額を區分す。

(1) 妻 二五圓
 東京市 二五圓
 特定地域 二〇圓

總務局勤務 野中 洋子
 同 伊藤 キエ
 編輯局勤務 島村 道子
 同 丸山 せよ
 同 酒出 貞子
 同 今中 澄子
 同 石丸シズエ
 同 福田瑠璃子
 同 山形支局勤務 高橋 清助
 同 准社員試用 宮崎支局勤務 中村 敏子
 同 准社員試用 高松支局勤務 笠原 正
 同 准社員試用 務社試用 藤村 清治
 同 務社試用 佐々いつ子
 同 藤本支局勤務 伊藤 巖
 同 准社員試用 藤原 キミ
 同 准社員を命ず(六月一日附各通)

總務局勤務参事 波多 尚
 編輯局勤務参事 長島 又男
 海外局勤務参事 萩原 忠三
 休職を命ず(五月一日附各通)
 高松支局勤務社員 澤村 秀喜
 休職を命ず
 (四月三十日附)
 經濟局勤務社員 四條 錦富
 高知支局勤務社員 酒井 晴雄
 職員規程第十九條第二號に依り休職を命ず
 (五月一日附各通)
 清津支局勤務 金川 承吉
 聯絡局勤務社員 笹山 正治
 依願解職(四月二十六日附)
 大阪支社勤務 松下 艶子
 依願解職(四月二十七日附)
 名古屋支社勤務 宮脇 良一

其他の國內 一〇圓
 支那各地 七五圓
 (2) 子女 五圓
 國內 五圓
 支那各地 一五圓
 (3) 父母 五圓
 國內及び支那 五圓

〔註〕東京市はその隣接市町村を含むものとす。

特定地域は横濱、川崎、名古屋、京都、大阪、神戸、下關、門司、小倉、福岡各市ならびにその隣接市町村および朝鮮、臺灣、樺太とす。

故山本元帥の靈車 迎送

同盟本社では六月五日故山本五十六元帥の國葬に際し、島山、堀、鷹野各常務理事、各局部長以下各部代表多數が本社西横の日比谷公園内幸門内路傍に整列し、謹んで巨將の靈車を迎送した。

依願解職 桑原 景男
 中支總局勤務 依願解職(四月三十日附各通)
 休職期間満了につき退社(四月三十日附各通)
 札幌支社勤務 武田 綾子
 准社員
 依願解職(五月三日附)
 札幌支社勤務社員 樋下 馨
 依願解職(五月六日附)
 經濟局勤務社員 村岸 正雄
 依願解職(五月十一日附)
 海外局歐米部次長 百々 正雄
 依願解職
 鹿兒島支局勤務 山口 一穂
 聯絡局勤務囑託 小川 寅市
 依願解職(四月二十三日附)
 海外局囑託 廣 肇
 同 宋 玉琛
 同 韓 雲中
 依願解職(五月十一日附各通)



【四月分】

△結婚

齋藤 玄彦(編輯局) 中島 義治(同) 安本 永樂(經濟局) 山田 富美(同) 原子林 二郎(編輯局) 德江 清太郎(同) 木村 嘉長(經濟局) 水谷 千萬樹(聯絡局) 岡崎 光一(編輯局) 刀根 治平(福岡支社) 鈴木 博三(大阪支社) 岡田 朝雄(同) 工藤 貞義(秋田支局) 田村 孝逸郎(臺北支社) 陳 迫生(高雄支局)

△出産

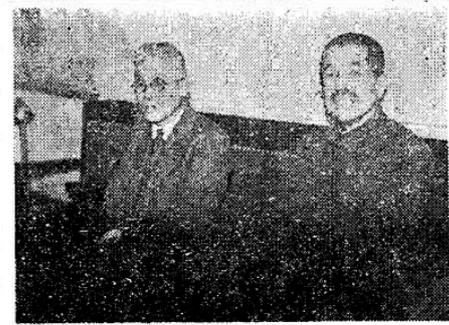
西村 二郎(編輯局) 三女 石川 道別(經濟局) 三女 田崎 花馬(海外局) 長女 金川 義人(總務局) 同 城間 得榮(編輯局) 三男 小野 勝三郎(經濟局) 長男 岡本 輝磨(河内支局) 長女 松本 甚吉(福岡支社) 三男 近藤 公一(蘭貢支局) 長男 永由 武秋(神戸支局) 長女 羽入 義夫(同) 二女、三女 上杉 憲治(熊本支局) 長男 島田 武明(富山支局) 次女 新田 良藏(金澤支局) 三男 渡邊 定吉(仙臺支局) 長女 岩邊 高雄(横濱支局) 長男 岡田 利平(函館支局) 次女

△見舞

松本 幸一(岡山支局) 次男 西 輝(臺北支社) 次男 三木 嘉隆(同) 同 泰泉寺 清三(北支總局) 長女 松原 一夫(北支總局) 三男 久木 和雄(油頭支局) 長女 小島 芳雄(中支總局) 長男 楠田 修(大阪支社) 三女

吞氣園後日譚

期 × 劇 × 時 五月十二日午後 場所 同盟社長室 人物 主人 五十歳位、イカ 栗頭の國民服 客 同年輩、但し頭



客「オ、古野さん、暫くでございまして。一度伺ひたいと思ひながら貴方が餘り偉くなられたのでツイどうも。」と、懐しげに入る。 主「ヤア、林さん、大分白くなられましたな。失禮だが途中で會つたのでは判らない。サア、どうぞ。」と座をすする。 客「その筈ですよ。丁度三十年になりますからね。夢のやうです。」 主「成る程さうですね。私が二十、三の時でした。のんき園主人に納つてゐたのは。」 客「一體あの頃貴方は何んで養鶏ナンかやつたんですか。」 主「大した意味はないです。當時私は一介の英語青年で博覽會の

事務所に勤め五十圓の月給を買つてゐたが、苦學青年を抱へ込んでゐたので、五十圓では足りない。そこで三軒茶屋に方丈庵を建て、のんき園と號して卵を賣つて互に勉強しようといふ計畫を樹てたといふわけでした。」 客「貴方から熱心に英語を習つてゐた學生さんがありました。」 主「あ、あの入ですか、あの人は海軍大佐になつて、今艦長を勤めてゐますよ。出世頭でせう。」 客「出世頭は貴方ですよ。私ナンか昔のまゝの鶏屋です。」 主「イヤ、林さん。日本一の養鶏王の名を聞くこと既に久しい。その日本一の林さんがのんき園同業の舊友だと判つた時は、實になつちかしたつたですよ。」 客「イヤ、私の今日あるは貴方に學ぶところが多いのですよ。のんき園はのんきさうであつて養鶏管理は實に上手であつた。」 主「それは素人は素人だけに、日

當りだとか通風だとか考へて工夫して見ると、成る程卵はよく産みました。あの附近の同業者では一番だつたかも知れませんが、だか商賣はカラ駄目です、サツパリ利益がない。そこで直接消費者に供給することを考へたです。配達には私の役目で、勤に出る前に籠を下げて勝手口の女中さんに渡して廻つたんです。ところが博覽會へ高貴の方か外國使臣の見える時は弱つたです。その頃のことでですからロッコフコートを着なければならなかつた。女中さんがドギマギしてゐる間に、フロットの卵屋さんスタコラ逃げ出したもので。」 客「のんきさうに見えてゐたが中々苦勞があつたんですね。」 主「イヤ、やつぱりのんきなものでした。時間と金さへあれば材木屋さんから材料を買つて来て鶏舎の修理改善に凝つたもので。便所だけは庭の隅に作つた

が、臺所も押入もない家に住んで鶏舎の工夫に没入してゐました。」 客「そんな熱心だつたのにとどうして止めて仕舞つたんですか。」 主「これも大した意味はないんです。たしか報知の夕刊だつたと覺へてゐますが、『武蔵野の一角に鶏を飼つて苦學生を養ふ感心な青年』とか何とか書き立てられたんで急に熱が冷めてしまつていやになつたんです。」 客「それからどんな風に通信社への道を歩かれたんですか。」 主「それを話せば實に滑稽な思ひ出話になるんです。がもう時間です。時節が別に準備もありませんが飯でも食つてゆつくり話しませう、さアどうぞ。」 主人は客を導いて室を出て行く。

幕一 (寫眞は當日の舞臺面、右はその昔ののんき園主人、左は現在養鶏王林鯛三郎氏)

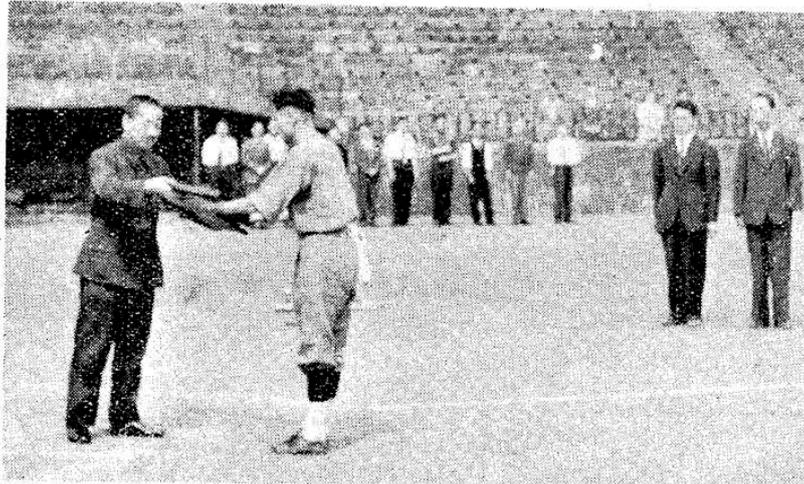
△退社

新井 正義(編輯局) 病 氣 大村 徳太郎(聯絡局) 同 田中 泰一(同) 同 神 秀雄(編輯局) 同 田中三之助(總務局) 長男病氣 同 平井 孝一(編輯局) 病 氣 富田 市之進(同) 同 小林 修三(同) 同 豊田 清(編輯局) 病 氣 高橋 耕司(聯絡局) 夫人病氣 高橋 二子(編輯局) 病 氣 小糸 忠吾(海外局) 夫人病氣 塚本 義隆(總務局) 同 船木 重光(同) 同 山口 政男(同) 同 關口 誠(同) 同 吉原 一真(聯絡局) 同 堀田 榮(經濟局) 同 廣瀬 次郎(同) 同 市川 大吉(同) 同 榊 秀雄(編輯局) 同 林 六郎(同) 同 川上 十郎(同) 同 日比 靜一(名古屋支社) 同 山下 フクチヨ(福岡支社) 同 近藤 公一(蘭貢支局) 同 河瀬 四郎(大阪支社) 病 氣 横井 義一郎(同) 夫人病氣 井 納(同) 盜 難 河井 イネ(同) 病 氣 三浦 良道(同) 夫人病氣 磯部 亮平(同) 病 氣 津田 春藏(同) 同 岡本 春一(同) 同 木幡 治榮(同) 同 丸野 恢(神戸支局) 夫人病氣 浦中 薫(熊本支局) 火 災 大原 寛明(清津支局) 病 氣 高木 慶司(花蓮港支局) 夫人病氣 松永 正龍(中支總局) 病 氣 桑原 景男(同) 同 渡邊 正二(天津支局) 同 北川 武(同) 同 鈴木 藤夫(北支總局) 同 角田 匡(昭南支社) 同 飯村 弘(マニラ支社) 同 今泉 善次郎(平壤支局) 病氣 田村 二郎(西貢支局) 同 郷田 堯巳(西貢支局) 養父死亡 花田 悦子(經濟局) 祖父死亡 杉田 榮三(北支總局) 實父死亡 鹽谷 作美(メダン支局) 同 大峽 義雄(高知支局) 死 徳山 辰行(大連支局) 實父死亡 橋川 馨(編輯局) 四女死亡 高橋 二子(同) 死 伊藤 大二(總務局) 實母死亡 一ノ瀬 博(同) 實父死亡 松本 貞男(聯絡局) 祖父死亡 荒川 利男(編輯局) 祖母死亡 宮川 俊夫(金澤支局) 同 大津 慶吾(旭川支局) 實母死亡 千原 芳生(高支支局) 實父死亡 山口 良雄(中支總局) 同 井下 博(同) 祖母死亡 大塚 勇吉(北支總局) 實母死亡 小久保 丈夫(南支總局) 實父死亡 畑瀬 輝男(平壤支局) 實母死亡 元木 俊夫(聯絡局) 龜谷 笑子(海外局) 安藤 壹(聯絡局) 武田 桃子(海外局) 伊藤 秀夫(編輯局) 大倉 旭(海外局) 加藤 博(聯絡局) 荒井 善治郎(同) 榊井 史江(經濟局) 石屋 靜枝(大阪支社) 廣澤 綾子(同) 石井 榮子(同) 中島 ヨシ子(同) 本間 トヨ(新潟支局) 牧野 正治(名古屋支社) 須賀 井清介(山形支局) 前田 廣一(花蓮港支局) 陳 存福(同) 西原 曉江(中支總局) 庄次 武夫(北支總局) 相賀 トミ(同) 林 義人(平壤支局) 合計(件數) 一五二件 (金額) 八、九八〇圓

本社各部對抗野球戦

榮楯社會部に輝く

恒例の第三回社長旗争奪社内各部對抗野球戦は四月二十日の歐米...



四谷驛隣の東京市営球場を確保し例年の球場難を解消することが出...

調査部は戦前秘かに四谷球場で猛練習を行つて必勝を期せば、新鋭...

に社會の制覇が成つた。かくて全試合を終了、古野社長より榮ある優勝楯を高田社會部主...

は五月三十日南海電鐵高野線沿線の中百舌鳥球場で華々しく開催した。



待避壕建設作業

△社會部15—8 調査部(一回戦) 木田、岡村兩投手を始め中野...

△社會部9—0 政經部(決勝戦) 球場も増舞臺神宮球場に移つて...

Table with columns for teams (政經, 社會) and players, listing scores and statistics for various matches.

【大會記録】 一回戦 歐米部15—5 内經文化部、社會部15—8 調査部、出版...



待避壕を構築 鬼畜の米空軍の來襲に備へ、北九州の中樞地帯にあるわが福岡支社では産報結成後最初の鍊成事業...